

美術の窓(148)

生(なま)の作品を判断する力

大和文華館館長 浅野秀剛

昨年の秋、京都の浮世絵商「西春」のご主人である関川亨さんが亡くなりました。関川さんと私は親子ほど年が違うのであるが、縁あってか、国際浮世絵学会の機関誌「浮世絵芸術」に追悼の辞を書くことになった。その時、真っ先に思い出したのが、初めて関川さんにお会いした時のことである。

それは、1977年7月、東京の国際文化会館で国際摺物会議が開催された時であった。その2日目に、関川さんなど数人の人が、持参した、オリジナルと複製の摺物(非売品の浮世絵版画)を机上に広げられた。そしてそこに皆が集まり、それらを手に取りあるいは光にかざして、特徴と差異を議論したのである。それは私にとって衝撃的であった。作品に直接して自由に拝見し、比較して学ぶことができるとは思わなかったのである。大変勉強になった。誰かが持参した摺物を関川さんはオリジナルに間違いないと言ったところ、持参した本人が疑念を示すので、ならば買い取りましょう、と言われたことを鮮明に覚えている。

その後、私は『原色浮世絵大百科事典』の編集部の嘱託となり、校閲の仕事と原稿執筆に4年半従事した。そこでは、頻繁ではないものの、時折事典に掲載するための作品の撮影があり、その助手を務めたので、直に作品に触れる機会があった。そして30代半ばで千葉市に勤めることができ、美術館学芸員のスタートに立ったのである。

学芸員になると、多かれ少なかれ、生(なま)の作品を見て、それがどのようなものなのか判断をしなければならない局面に出くわす。生(なま)の作品とは、専門家の誰も判断していない作

品をいう。その時、どの範囲の作品をどの程度正確に判断できるか、ということが極めて重要になる。私はそれを時々「現場力」と呼ぶ。近年私は、後輩の学芸員に、その現場力を伝えることが極めて重要であると認識するようになった。

私が現場力を養えたのは、学芸員として作品に接する機会が多かったということもあるが、海外調査の経験に依るところが大きい。ヨーロッパの浮世絵コレクションを取材・紹介する講談社の企画(『秘蔵浮世絵大観』と題して16巻刊行された)が1985年頃から始まり、それに参画させていただいて、都合3度ヨーロッパの取材・撮影旅行に携わることができたのが最初である。1990年には、リンデン博物館の近世絵画の調査を依頼され、1992年から3年間は、毎年、国際日本文化研究センターのプロジェクトに参加し、ロシア、東欧のコレクションの調査に携わった。加えて、展覧会のための調査もあった。その時私はまだ30代後半から40代初めであり、キャリアを考えると、生の作品を一人で判断できるかかなり不安があった。しかし、そのような調査の場合、未整理のものの度合い(どのレベルまで整理されているか、それがどの程度正確か)とその量を勘案して、調査する作品を選定することから始めることが多かった。その時求められるのが現場力である。一日に500〜1000点あるいは数千の作品を峻別しなければならなかったこともあった。

例えば、一定レベルの浮世絵版画を取材するという目的ならば、肉筆画・写本、中国など日本以外の国の作品、近代の複製、版本の断片などを仕分けし、調査する浮世絵版画を選別す

るということが必要となる。その上で、調査可能日に比してまだ全体の量が多い場合は、更なる絞り込みをしなければならない。理想的には、全てのものを調査する悉皆調査が望ましいが、それをするには時間も費用も足りないのが普通であった。

今振り返ると冷や汗ものであるが、その頃の恵まれた環境が、私の現場力の向上に大きく寄与してくれたことは間違いない。その後、今に至るまで、海外に調査に行かなかった年はないくらい、恵まれた研究者人生を歩んできたのである。

そんな私が、若い研究者の現場力の向上を意識し始めたのは、10年ほど前である。私が教わってきたこと、現場で学んだことを後世に伝えなければならなかったのだ。論文など文字で伝えることができるものはそれでいいが、感覚でしか伝えられないものもあり、それを伝える責務のようなものを自覚した。聞いてみると、大学ではほとんど教わらなかった人が多かったのである。

そこで、2009年5月31日、京都文化博物館で、浮世絵版画ワークショップを行った。「西春」さんの摺物のコレクションをお借りしての、若手浮世絵研究者向けのワークショップである。浮世絵版画の研究者にとって、オリジナル(最初に制作された版から摺られた作品)とコピー(複製版画、ほとんどは明治以降に作られたもの)の峻別(鑑定)は常につきまとう厄介な問題である。そして摺物は特に難しい。だから、オリジナルとコピーを比較するワークショップを行ったのである。10から15名くらいで実施するつもりでいたが、結局、関東から九州まで、アドバイザーを含

めて20人という想定以上の人が集まった。その夜の懇親会で、こういう機会をこれからも設けてくれという人が多かったので、私なりに可能性を探ってきたのであるが、実現できずに10年近い年月が流れた。

今考えているのは、まだ、整理されていないコレクションのリストを作るワークショップである。美術館のものでも個人のものでもいいが、古いもの新しいもの、肉筆ものと版画や時に印刷物など、オリジナルとコピー、日本のもののなかに中国のものなどが混じったり、本の一部のようなものがあつたりと、雑多なものであれば理想的である。これはという良いもの、掘り出し物、珍奇なものないモチベーションが維持できないし、平面でイメージ中心のものでないとアドバイスできないといった問題はあるが、そういったものの目録化を通じて、現場力、生の作品を判断する力を養おうというワークショップである。議論を活発化しより正確なリストを作るために、私以外のアドバイザーの参加も要請するが、助言は最小限度、最終段階にして、若手だけで議論して結論を出すプロセスを大事にしたい。

当然ながら、コレクションを所有する機関・個人にはかなりの負担を強いることになるが、金銭的なものはすべて参加者が負担し、きちんとしたリストを提供することで所有者に報いたいと思っている。

私の心身に力が残っているうちに実行しなければならないので、もう後がない。

季刊 美のたより No.206

平成31年 4月 12日

発行 大和文華館